

1. 評価結果概要表

作成日 平成21年1月23日

【評価実施概要】

事業所番号	1275900122		
法人名	医療法人社団慈優会		
事業所名	グループホーム日の出		
所在地	〒283-0104 千葉県山武郡九十九里町片貝2582 - 9 (電話) 0475 - 70 - 7878		
評価機関名	特定非営利活動法人コミュニティケア研究所		
所在地	千葉県千葉市中央区千葉港4 - 4千葉県労働者福祉センター5階		
訪問調査日	平成21年1月23日	評価確定日	2月25日

【情報提供票より】(21年1月8日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成15年11月1日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	17 人	常勤 7人, 非常勤 10人, 常勤換算	17人

(2) 建物概要

建物構造	鉄骨造り		
	1 階建ての	1 階 ~	1 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	43,000円	その他	食費43,000円, 光熱費7,000円, 理美容代2,000円, おむつ実費	
保証金の有無(入居一時金含む)	有300,000円	有りの場合償却の有無	退居時、ハウスクリーニング代、破損修理代を相殺後残金を銀行振込にて返金	
食材料費	朝食	500 円	昼食	600 円
	夕食	700 円	おやつ	夕食代に含む
	または1日当たり 1,800 円			

(4) 利用者の概要(1月8日現 現在)

利用者人数	18 名	男性	3 名	女性	15 名
要介護1	2 名	要介護2	2 名		
要介護3	6 名	要介護4	8 名		
要介護5	0 名	要支援2	0 名		
年齢	平均 80.6 歳	最低	69 歳	最高	98 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	医療法人社団慈優会九十九里病院 千歯会訪問診療部
---------	--------------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

母体の医療法人が隣接して「九十九里病院」を経営しており、入居者・家族に医療面で安心感のあるグループホームである。医療のバックアップが万全なため、比較的介護度の重い人も入居可能であり、介護の専門性が高い印象を受ける。ホームの施設長をはじめ職員の多くが地元出身者であることから、地域との交流も積極的で多彩である。小学校や保育園、町役場なども近くにあり、子どもたちとの交流や運動会、文化祭などを通じえ関わりを深めている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況についての記録がホームになく、明確な状況がわからなかった。改善計画などを作り、この1年で各課題にどう取り組んだか、いつでも誰にでもわかるようにしておくことが望まれる。
重点項目	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	自己評価には出来るだけ多くの職員が参加し、評価票の各項目に一人ひとりの職員が書き込みを行なうことで、自己評価の意義を再認識できるような働きかけをしている。しかしながら全職員が残らず記入するまでの参加には至っていない。この働きかけは、これからも続けることが期待される。
重点項目	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4,5,6)
	運営推進会議には町の高齢者福祉の担当者、地域の町内会の役員、法人病院からの担当者、家族代表など幅広い関係者が参画し、ホームの運営や地域交流に協力・支援している。
重点項目	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7,8)
	ホームに対する意見や苦情は、家族が来訪したときなどに、率直な声を聞くようにしている。意見や苦情を受けたときは速やかに会議を開き、対応することになっている。新しく入居して来た人が一日も早くホームに馴染めるよう、入居者には一人ずつの担当職員を決め、家族のような関係づくりに努めている。
重点項目	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	地域の小・中学校から児童らがホームに遊びに来たり、ホームの入居者が学校行事を見学している。散歩や外出の際には、入居者・付き添いの職員が地域の人びとにあいさつし、馴染みの関係を深めるようにしている。

2. 評価結果 (詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	グループホームだけでなく法人全体の理念として、入居者一人ひとりの人格の尊重、地域との連携、サービスの向上を3本柱に掲げている。とくに第1の柱については「人のいのちを至上のものとし、人種、宗教、国籍、政治、社会的地位等で入居者を差別することなく平等に介護する」とノーマライゼーションの理念をうたっている。		
2	2	理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	3本柱の理念は紙に大書してホームの玄関やユニットの壁に掲示し、いつも職員や入居者・家族の目にふれるようにして、意識している。		
2. 地域との支えあい					
3	5	地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	施設長をはじめ介護職員の半数以上は地元の人。施設長は法人が経営する病院の看護婦長を長く勤めて来たり、職員も地域との馴染みの関係はもともと深い。保育所や隣接小学校の行事、町内会や町の文化祭・体育祭などに入居者とともに参加している。近年、商工会にも加盟して地域交流に努めている。		
4	7	評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	職員も自己評価に参加してサービス向上を目指せるようにと、自己評価票をユニットに1部ずつ配布し、各職員に記入してもらった。それを集約し、責任者が目を通してホームとしての自己評価を作成している。しかし、職員全員が記入するまでには至っていない。	○	自己評価は職員全員が関わることが望まれる。またその際、前回評価における指摘事項の改善状況を記録するようにして、職員全員で確認しあうと更によいと思われる。
5	8	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は、法人経営のグループホーム・病院の責任者をはじめ、町の福祉部局の担当者、地域の代表、入居者の家族代表などで組織され、その幅広い参加と協力がホームを支えている。会議は2ヶ月に1回定期的に行われ、入居者の状況報告やサービスの向上、地域との関係強化などをめぐって意見を交わしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	町の高齢者福祉部局や地域包括支援センターと連携を保つなかで、地域に暮らす認知症高齢者らの問題状況を把握したり、ホームとして出来ることには鋭意対応するなどの協力関係をつくっている。		
7	14	家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	家族には毎月、ホームからの各種お知らせや金銭の出し入れ報告とともに、入居者の健康状態や日々の暮らしぶりを知らせるお便りを送付している。一人ずつ入居者についている担当職員が、催しや散歩時などに撮ったスナップ写真を添え、いきいきと報告している。		
8	15	運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ホームに対する意見や苦情は、家族が来訪した際に率直な声を聞くようにしている。苦情を口にする家族は少ないが、意見・要望が出た際は、速やかに会議を開き、対応することになっている。施設長とケアマネジャーが担当する、常設の苦情相談窓口も設置している。		
9	18	職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	入退居などで、A、B二つのユニットの入居者数や介護の度合いにアンバランスが生じる場合がある。それに対応して職員の配置を変更する必要がある際は、職員のユニット異動が行なわれるが、残っている入居者の担当職員はそのまま替わらないので、入居者に混乱を与えることはほとんどない。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	県などが催す外部研修の案内には施設長が目を通し、内容に合った職員を優先して研修に行かせている。研修結果はミーティングの席などで報告し、共有を図っている。内部研修も自主的な勉強会の形で適宜行なっている。救命救急の資格は職員全員が取得している。		
11	20	同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	千葉県グループホーム連絡会に入会し、2ヶ月に1度の会議には欠かさず参加している。所在地・山武郡エリアの会員ホームとともに、とくに認知症介護のネットワークづくりや学習会、相互訪問等の活動に取り組んでいる。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	<p>馴染みながらのサービス利用</p> <p>本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している</p>	<p>新しく入居して来た人が不安なく、一日も早くホームに馴染めるように、入居者には一人ずつの担当職員を決めている。入居者のもとより家族との対応、持ち物の管理などをすべてを任せ、家族の一人のような関係づくりに努めている。入居前には、事前のホーム見学にも応じている。</p>		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	<p>本人と共に過ごし支えあう関係</p> <p>職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている</p>	<p>食事の準備やあと片付け、洗濯物を干したり取り込む作業など、入居者に出来そうなことは可能なかぎり手伝ってもらうようにしている。職員が「○○さん、野菜刻んでくれない?」「さん、お茶碗拭いて?」などと声かけし、参加を促している。</p>		
.その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	<p>思いや意向の把握</p> <p>一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している</p>	<p>入居者がホームでどのように過ごしたいかは、本人・家族からの事前の聴き取りや入居後の暮らしの様子を観察しながら把握している。ときには入居者本人と家族の思いが食い違う場合もあり、そのようなときはホームが間に立って、できるだけ本人本位になるよう調整に努めている。</p>		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	<p>チームでつくる利用者本位の介護計画</p> <p>本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している</p>	<p>入居者のケア方針を決める介護計画は、本人の健康状態や生活歴はもとより、家族ら必要な関係者との話し合い等をもとにつくられる。入居早々から必要な情報を十分把握できるとは限らないため、一定期間は入居後の様子を観察し、ケアチームの意見も加えながら介護計画をつくることにしている。</p>		
16	37	<p>現状に即した介護計画の見直し</p> <p>介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している</p>	<p>介護計画は1～3ヶ月ごとにカンファレンスを通して定期的に見直しをしているが、入居者の心身の状態に変化があった場合には、随時、計画の手直しや補足を行ない、職員間への周知も徹底させている。内容によってはケアマネジャーにも相談し、解決を図っている。</p>		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	事業所は地域に密着しており、近くの小、中学校の生徒による職場体験や地域住民の施設見学を受け入れて、ホームの事業内容や認知症を理解する機会をつくっている。今後の計画として、職員が現場の介護を通して積み重ねた知識や体験を、地域の人にとってもらう講演会や勉強会の開催もめざしている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者の多くが地元や近隣の人で、これまでも法人経営の病院を「かかりつけ医」にしてきた人が多い。したがって、日ごろの受診や病気の際の治療を法人の病院にゆだねる人に対して、入居後もホームは病院とともに柔軟な支援を行なっている。		
19	47	重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	病状が重度化し、ホームで終末期を迎えるような場合の対応については、詳細なマニュアルが作成されている。基本的な対応は入所の際、本人・家族に説明しており、現実にその時期が近づいた時は、主治医のインフォームドコンセントをもとに本人・家族の意向を再確認し、希望者に対して看取り介護をすることになっている。その際は契約書を交わすことになっている。		
. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1) 一人ひとりの尊重					
20	50	プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	ホームは一人ひとりのプライバシー確保を心がけている。職員は個別対応のなかで、言葉かけや働きかけに気を配りながらのケアに努めている。地域密着型であることから近隣の入居者が多いので、個人情報の保護や守秘にも細心の注意を払うようにしている。		
21	52	日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大まかな一日のスケジュールのなかで、なるべく個人のパターンに合わせて食事時間や就寝時間を調整している。食事の摂取形態も入居者の希望に合わせて提供している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	皆で楽しく食事が出来るよう、配膳が済むと職員は入居者と同じテーブルにつき、声かけをしながら一緒に食事をする。調理や盛り付け、食器並べ、後片付けなどは、できる人をうながして、できる範囲で手伝ってもらっている。食事介助が必要な入居者には、職員が寄り添っている。		
23	57	入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	通常はほぼ3日に一度のペースで入浴している。失禁時等には清潔にするため随時対応している。入居者は主に午前中の入浴を希望しているが、希望に応じて午後にも対応できるようにしている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	日々の生活のなかで、食事の準備や後片付け、洗濯物のたたみ、家庭菜園の手伝いなど、それぞれの能力に合った役割を持つようにしている。また自由時間には、折り紙やおはじき、塗り絵、裁縫などのほか、皆で歌をうたって楽しい気分になれるよう働きかけている。		
25	61	日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	買い物の希望があれば、職員が付き添うようにしている。ホームに閉じこもることのないよう、なるべく天気の良い日には近くの遊歩道へ散歩に誘い出すようにしている。また午前中は、隣接の病院に入居者がリハビリに通うスケジュールが組まれており、これも気分転換のひとつになっている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	出入口は鍵をかけておらず、自由に出入りできる。気づかぬうちに入居者が出入りしないよう、職員が常時注意を払っているため、センサー等もつけていない。		
27	71	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	年に2回、防災訓練を実施している。消防署や火災報知機の業者の人たちにも参加協力してもらい、指導を受けている。入居者も全員が参加するようにしている。また、災害時には地域住民の協力も得られる関係性をつくっている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は、配食業者がカロリー計算した食材が届き、職員が調理して提供している。個人ファイルにはそれぞれのバイタルチェック表、水分量、排泄記録が保管されており、体調がわかるようになってきている。一時期、ホーム独自で食材調達を試みたが、入居者個々の栄養バランスへの配慮など難しい面も多く、いまも業者に委託している。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関から施設内にかけて、畳敷きのスペースも含めてすべてバリアフリーになっている。廊下は車椅子がすれ違っても支障のない広さになっている。ソファも自由に座れるように用意されているが、入居者のほとんどは食堂兼居間の椅子に腰かけて過ごしている。		入居者用に新聞が配達されたり、玄関に季節の飾り物が置かれるなど居心地よい共用空間づくりへの配慮はされている。が、建物が住居的な構造になっていない部分もあるためか、グループホームがめざす家庭的な雰囲気にはやや欠けている感がないでもない。家庭にいるのと同じようにホッとできるような空間を創り出すために、もう一押し工夫が期待される。
30	83	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホームでは、入居者がこれまで自宅で使っていた馴染みの家具や小物類を自由に持ち込み、居心地良く過ごせるようにしている。入居者はそれぞれ家族とも相談しながら、小机や本箱、花瓶、写真飾りなどを居室におき、好みの居場所をつくっている。		